

其末流上州奥平郷に住せしより、平氏と稱し、奥平と號す、然れども本姓は源氏なり、又佐竹修理大夫義隆は、岩城定隆の男なり、然れば今の佐竹は平氏なるべしと云、定隆は從三位左中將義宣の弟にして、岩城の養子となれり、然れば義隆本姓平氏に非ず、

是等の類多し、能々系圖を改むべし、

〔鹽尻五十二〕一我國古へ、姓につきたる尸朝臣宿禰の類也あり、是を以て姓の高卑を成せり、されば官人

罪あれば、尸を卑したまふ事あり、

〔日本書紀九三〕二年二月己酉、立忍坂大中姫爲皇后、中初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪鷄國造、從

傍徑行之、乘馬而蒞籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎、汝者也、汝此云、那且曰、壓乞尸母、其蘭一莖焉、壓乞此

尸母此、皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蟻也、蟻此云、摩、時皇

后結之意、裏乘馬者辭无禮、即謂曰、首也、余不忘矣、是後皇后登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪

以欲殺、爰乞蘭者、類搶地叩頭曰、臣之罪、實當萬死、然當其日、不知貴者、於是皇后赦死刑、貶其姓、謂稻

置。

〔日本書紀通證十八〕今按古昔賜姓、猶如官爵、以甲乙黜陟之、蓋本邦重族望也、

〔續日本紀四十四〕延曆十年正月己巳、典藥頭外從五位下忍海原連魚養等言、謹檢古牒云、葛木襲津彥

之第六子、曰熊道足禰、是魚養等之祖也、熊道足禰六世孫、首麻呂、飛鳥淨御原朝庭武、辛巳年、貶賜

連姓、

〔日本後紀八〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻

呂薨、中清麻呂爲人高直、匪躬之節、與姊廣虫共事高野天皇、孝並蒙愛信、中此時僧道鏡得幸

於天皇、出入警蹕、一擬乘輿、號曰法王、太宰主神習宜、阿蘇麻呂媚事道鏡、矯入幡、神教言、令道鏡、即帝

位、天下太平、道鏡聞之、情喜自負、天皇召清麻呂於牀下、曰、夢有人來、稱入幡、神使云、爲奏事、請尼法均

貶姓